

### 【研究課題名】

子宮頸がん検診等の受診者を対象としたヒトパピローマウイルス (HPV) の疫学調査

子宮頸がんは、SEXにより感染したHPV（ヒトパピローマウイルス）が持続感染することが原因であるとされ、本邦では年間約9,800人が発症し約2,700人が死亡する疾患です。特に20歳代後半から40歳代前後の比較的年齢層の若い世代に発生します。HPVには100種類以上の種類（遺伝子型）があり、このうちの約15種類が子宮頸がんの発症に深く関与していると考えられています。特に、16型あるいは18型のHPVの持続感染（10年以上にわたり継続した感染）を原因とした子宮頸がんの割合が高いことが判っています。

一方、16型および18型のHPV感染を予防するためのワクチンが開発され、感染していない人がこのワクチンを接種することで両型の感染を予防することができることから子宮頸がんの60～70%については発症予防が期待されています。しかし、16・18型以外の種類の感染による子宮頸がん（子宮頸がんの30～40%）発生の予防は期待できない状況です。

このような状況を踏まえ、今回の研究では、以下の目的について研究を進めます。

- ① 県内で感染しているHPVの種類について分布状況を把握するとともに、HPVの種類や遺伝子変異の状況と腫瘍の発生あるいは細胞の異型化（細胞診の結果）との関連性を検討します。
- ② ワクチン接種群と非接種群について感染しているHPVの種類や遺伝子変異の状況を調べることで、既存のワクチンの感染予防効果を検証するとともに、今後、新たな多価ワクチンが発売された時の予防効果予測のための基礎データとします。
- ③ HPVは同じ型に再感染することが知られています。この再感染と言われている事象が一過性の感染の繰り返しののか（真の再感染）感染しているウイルス量が一時的に減少することで検出できなくなり再度ウイルス量が増える事で検出できるようになる持続感染の1つの現象なのかを検証することは発がんのリスクを考えるうえで重要です。そこで、要精密検査となり、当財団を受診した方について継続的にHPV検査を実施し、ウイルスの消褪を含めた感染状況および感染しているHPVの種類や遺伝子変異の状況を追跡することで、発がんリスクの関連について検証します。

本研究期間は、2014年4月から2019年3月末までの間とし、詳細については、検体の提供を受ける方に受診時に書面をもって説明し同意を得たうえで行っている研究です。また、本研究は倫理審査委員会の承認を得て、理事長が許可をした研究です。

なお、この研究に検体を提供している方で、この研究についてご質問がある場合には、下記までご連絡ください。

### 【研究責任者】

- ちば県民保健予防財団検査部病理・細胞診断科 立花美津子
- 千葉県衛生研究所ウイルス研究室 小川知子 (Tel : 043-266-6725)